



Fグループ会報

No. 14
フェリス女学院短期大学
音楽科
Fグループ

音楽と私

中島省吾
(フェリス女学院長)

昨1984年9月1日に学院長の重責を担うことになりました。私は、学生時代から40余年の間、企業の経営とくにその財務関係のことを勉強した教えてきました。ですから、山永、桑田、宮本の諸先生のようにキリスト教あるいは哲学について専門的な勉強をしたわけではありません。また、専門学校や大学で、30数年間、専任の教師だったわけですが、幸田先生のように教育制度一般に詳しいわけでもありません。大学の運営については、昨年8月末まで勤務していた国際基督教大学で、いろいろな立場で責任を負ったことはありますが、学院長という大役に適しい人間とは思われません。ですが、理事諸先生の強い御要請をうけ、当女学院が当面する課題の解決について困難を分かちあう責任を痛感してお引受けしました。皆さんの御支援を心からお願いします。

音楽科の同窓会の皆さんに御挨拶する以上、お恥づかしいことですが、私と音楽との関係について知っておいて頂くのも何かの役に立つかと思ひ、この文に「音楽と私」という題をつけてみました。小学生および中学生(旧制)時代の私は、ハーモニカに親しんだことはありましたが、決して歌が得意だった方ではありません。むしろ、音楽の試験の時間に1人で歌わされるときは先生や級友の様子から察するところ、自分で思っていた以上に他人をハラハラさせていたようです。ところが、17才ぐらいのときから出席していた教会で、どういふわけか聖歌隊に入るように誘われて、それ以来若干の期間を除いては、現在所属している日本基督教団国立教会でも、数少ない男性メンバーの末席に列って、今日に至っています。

また、戦後1年ほど住んでいた一橋YMCA寮の後輩に鳥居忠五郎先生の息子がおり、彼に誘われて、中田羽後先生が指揮するメサイアの合唱に1946年と1947年の12月に参加しました。(そのとき、奥山家政科教授と御一緒になりました。)大変苦勞しましたが、お陰でメサイアには大変親しみ、家族には、私が植物人間になって寝たまま生きながらえることがあったら、24時間メサイアをテープで流してくれと云っているほどです。不謹慎な云い方かもしれませんが、教会や学院の礼拝で讃美の歌を唱うことが、今日の私の健康維持に不可欠なのかなと思ったりします。もちろん、聴くことについては、オラトリオに限らず、オペラ、リード、交響曲、器楽などいづれも、十分鑑賞できているわけではありませんが、大変好きな方だと云えましょう。

レコードを長時間聴く時間的余裕がないとレコード屋さんに嘆いたら、イヴ・モンタンの「枯葉」を買われ、それ以来、シャンソンも楽しむようになりました。パリのオランピア劇場でダリダを聴き、ロンドンでミュージカルをいくつか楽しんだのは、国際会議でいじめられたなかでの楽しい思い出でした。

以前から歌舞伎は好きだったので、国際基督教大学でそのことを聞きつけた学生にせがまれて、邦楽研究会の顧問を引受けてから、長唄を聴かされる機会が少し多くなりました。ただし、聴いているだけのことです。

このように回想してみると、私における音楽はいかにも雑然としているという感じをもちます。フェリスでの音楽に触れているうちに少しでもそのデリカシーを味わえるようにしたいと思っています。

三宅洋一郎先生に感謝をこめて

去る5月26日(日)、ザ・ホテル横浜にて、昨年度でフェリスを退職なされた、三宅洋一郎先生を囲んでの感謝のパーティーが催されました。当日は大勢の同窓生が集まり、創立当時から今までにわたっての先生の御苦勞話、又楽しいエピソードなどまさにフェリスの歴史そのままのお話が伺えました。尚、先生は本年度からフェリスの名誉教授となられました。長年の御苦勞に深く感謝を捧げると共に、いつまでもお元気でフェリスを暖かく見守って頂きたいと存じます。



昔を顧みて 三宅洋一郎

最初に私がフェリス女学院にピアノ担任の講師として勤めはじめたのは昭和16年6月でした。その頃のフェリスは5年制の女学校でしたが、特別に正規の授業時間のなかでピアノのレッスンが受けられる形になっていました。すでに日本とアメリカとの危機感深まる一方で、フェリスでピアノを教えていられた宣教師も帰米され、その後任として音楽学校を卒業して間もない私が選ばれたわけです。フェリスと私の関係はここが出発点です。

その年の12月に太平洋戦争が勃発しました。4年間にわたる激しい戦争が終った時、横浜の市街地の殆どは大空襲で焼野原となっていました。過酷な戦禍と試練、日本人のすべてが敗戦の打撃に打ちのめされていきました。

幸いに爆撃から免れたフェリスの校舎はアメリカ軍が接収していましたが、当時としては異例の早さで返還されて、やがて学校が再開されました。戦後の混沌のなかからやっと抜け出した私に、横浜に音楽専門教育の場を創りたいとの願望が燃え始めました。時を同じくして、フェリスに専門学校設立の機運がめぐって来ました。都留院長を説得して英文科、家政科と共に3年制の音楽科の創設に漕ぎつけたわけです。昭和22年のことです。

学校とは言っても寺小屋のようなもの。カイパー講堂の裏階段わきの物置部屋のような処が教室、壁型ピアノが2台。学生はたったの7名。それに対して音楽専門の先生が6名、一般教養の教師を加えると、大変な数です。教育に対する先生たちの情熱、受けて立つ学生たちの心意気。物はなくても、心は理想に燃えていました。初期の数年は事実上の専任教師は私一人で、ガリ版切りから掃除にいたるまですべて自分の手でしなければならぬ時代でした。

しかし、精神力だけで生れた音楽科が他の部門の協力的なしに経営が成り立つわけがないのは当然の成行です。音楽科に対する風当たりが次第に強くなり、廃止論まで湧き起り、全く四面楚歌の有様でした。「教育の成果は10年経ってみなければ分かりません。なんとか10年だけ続けさせて下さい」との切望が受け入れられ、創立後5年目に石段の途中に音楽科専用の校舎が造られました。

学校は音楽の基礎を造るところ、個性を十分に伸ばすこと。音楽の心を大切にという信念で音楽科を育てて来ました。10年後にはフェリスの音楽科の評価を世の中に確立することが出来ました。今から思うと、貧しい施設のなかで嫌でも守らねばならなかった少数主義教育の頃が、フェリス音楽科の最も良き時代であったのかもしれない。その後の音楽科の歴史は卒業生名簿がすべてを語っています。こうした現在の音楽科の由来は教育に熱意を傾けて下さった多くの先生がたと、卒業生たちの努

力の賜ものと私は信じています。

フェリスに最初に関係してから44年、音楽科が誕生してから38年、この4月から私も卒業生の1人に仲間入りさせて頂きます。ほんとうに長い間のご協力を心から感謝してやみません。5月26日のザ・ホテル・ヨコハマの集まりには、遠くは北海道、九州からも多勢の卒業生に馳せ参じて頂き、その上心暖まる記念品まで頂戴し、厚く御礼を申し上げます。

ピアノ音楽をめぐるて

武蔵野音楽大学教授 作曲科長

萩原英彦

18世紀の初頭、B. クリストフォリが、ピアノ エフォルテという楽器を考案したとき、人々は、この楽器の奏でる音を野蛮な音としてあまり好意的ではなかったと伝えられている。以来、2世紀のあいだにこの楽器は、その機構にさまざまな変化が加えられ、第3世紀に属する現代では、改良の余地のないまでに完成され、まさに楽器の王者としての風格を保つに至った。

そして、クラヴィコードやチェンバロ、またオルガン音楽にとって代るピアノ音楽という新しい領域を確立するのであるが、第2次世界大戦以降、目立った異変がこの分野に示されることになる。それは、極東の小さな島、経済大国として世界の矚目をかき、富を手に入れたもののみが尊敬されるその国においてである。

ピアノの生産台数世界一を誇る楽器製造会社の製品は街にあふれ、音楽大学でのピアノ専攻者は、一時のブームは去ったとは云え、圧倒的な比率を保有しているこの状態は、ただただ異様としか云いようがない。

「好きこそものの上手なれ。」などと云うことばのあるように、音楽の魅力にとり憑かれ、のめり込んで、止むに止まれず音楽を生業とするに至った諸先輩、そして少数派の私たちは、少なからずこの異様な状態に関心をもちざるを得ない。これ程多くの人々が、ピアノのなかかわりをもっていることを、音楽あるいは文化の隆盛と考えて良いかどうか。

閑静な住宅地を、夕陽をみるひとときに、そぞろ歩きをしてみると、心を洗われるようなピアノの音に、おもしろ立ちどまって耳を傾けるなど云う体験は今日全くなくなってしまった。

あるのは、音大通りのピアノにいどみかかるような粗暴な音の渦と、狂気のごとく疾駆する音の洪水である。

音楽コンクールや、音大の卒業試験で他を押し勝利を得るものは、こうした腕力にものを云わせる威圧的な演奏法と、神経の図太さを身につけたもののみである。

ピアノはあっても音楽はない、ピアノの中に音楽を聴くことはなくなってしまった。

これは、由々しき問題ではないか。

当時の人々が看破したクリストフォリのピアノ エフォルテの中に潜む野蛮な性質に日本人のもち合わせた野蛮な体質が共振をおこした結果は、私の師匠團伊玖磨が、猥雑な姿と形容する自動車の氾濫と軌を一にするものである。音楽不在のピアノ界というこの変則的な状態に危惧の念を抱かずにいて良いのだろうか。

かつて、兼常清佐博士が、「ピアニスト無用論」という意見を呈示して、世人の注目を浴びたことがあった。

猫が鍵盤の上を歩いても、人間が弾いても大差がない……という文章がその枕となっているが、この逆説は先人の発した今日への警告だったのではないか。

ピアノ程、弾き手によって、さまざまな変化が示される楽器はない。ピアノを鏡台のように見立てて描いたホフマンの「カリカチュア」があったが、ピアノは弾き手の心奥を写す鏡である……という点でこれ程本質をついたジョークはないと思う。また、ピアノ程、聴き手によって、さまざまな想いに色彩される可能性を秘めている音

を所有している楽器も稀であろう。

したがって、ピアノ音楽は、感性とか想像力という人間の心像に介入する極めて微妙な、かつ繊細な神経のもち合わせのないものには扱うことのできない領域である。

私が最近まとめたカワイ出版から刊行した『エチュード・アルモニーク』は我が国のピアノ界に欠落していると考えられる感性の練磨、想像力の育成を願っての試みである。真の技術の完成は、これらの背景の前にあって、はじめて意味をもつものなのである。

ピアノの音の持続は、消えていく音——減衰振動に対する補足的な条件によって保たれる。これは、ドビュッシーが興味を寄せた『全部を云い切ってしまう、ほめかしのことばの断片で、想像力によって蘇るべき詩』に例えられる。

また、立ち上りが極めて明晰な打鍵による発音は、耳の中に描かれる点描の絵にも例えられる。

物理的な音に触発された生理的な感覚が、(心理的な)意識としての持続を形成するところに、ピアノ音楽の特性がある。意識は、感覚によって惹起される精神活動である。精神の高みに到達するための前提となる感性の問題を、ピアノの学習において心がけなければならないことはすこぶる重要である。

感性の中心となるものは、言語感覚であろう。言語——ことばの具有する抑揚と韻律が民族固有の特性を示すことは云うまでもない。

したがって、ピアノ音楽の学習は先ず言語をとまなうたから始めなければならない。

J.S.バッハの作品を弾くときにM.ルーテルや、L.ハスラーのコラールを、ハイドンやベートーヴェンの作品を弾くときにはウィーン流りのドイツ語のうたを口ずさむことなくして、そのフレーズをかたちづくることのできるであろうか。

ドイツ民謡の抑揚が、シューマンやブラームスのピアノ小品の母胎となっていることは、ショパンの作品が、ベルリニーやドニゼッティなどのオペラ、またポーランドのうたに多くを負っていることと同様に明らかな事実である。フォーレやドビュッシーのピアノ音楽を、グレゴリオ聖歌や、フランス語の古謡を口ずさむことなくして色彩ゆたかに浮かび上らせたり、香気を立ちのぼらせるようなびびきで演奏することは不可能であろう。

そして、ラヴェルのあのほじらいを含んだ音の連らなりの韻律を、ことばの介在なしに把握することが、どうしてできようか。

我が国のピアノ音楽の分野に『わらべうた』や『民族的な抑揚をもつうた』を素材として求めることは確かに一つの方法であるが、日本人の言語——現実生きてる日本語としての素材、『わらべうた』の次の段階をかたちづくる日本のうたは、巷にうたが氾濫しているにも拘らず極めて乏しい。即ち言語感覚の洗練を推進するような日本語のうた、これが現実に最も必要とされているものである。私が、合唱音楽の領域に精魂をそそいできたのは、言語感覚の平均値を見出すためであって、その試行錯誤は今後も継続されるであろう。

J.J.ルソーの述べているように、自然共鳴による倍音系列の生みだした音型や、和音は自然を共有する人類共通の財産である。

しかし、民族固有のものとしてとされている言語をとまなうた旋律——うたの抑揚と韻律の投げかける色彩や香りが、洗練され昇華された日本語に由来するものとなるためには、今しばらくの時が必要である。(6.30)

昭和59年度会計報告 (60年3月末日現在)

収 入	支 出
前年度繰越金 9,115,388	研修会費用(水本先生) 106,280
59年度終身会費 3,300,000	(秋原先生) 208,690
研修会券代(水本先生) 42,000	Fグループリサイタル主催費用
(秋原先生) 36,000	660,680
Fグループリサイタルチケット代	演奏会後援費 80,000
419,000	慶弔費 53,400
フェリス・カード・葉書・タオル代	中部支部関係援助金 50,000
14,100	九州支部関係援助金 50,000
横浜銀行利息 50,809	支部関係出張費 96,770
富士銀行利息 551,972	音楽科事務所へ 50,000
	会報関係費 224,840
	会議費用 47,535
	フェリス・カード購入 10,000
	事務用品・通信費 18,620
合 計 13,529,269	合 計 1,656,815
	次年度繰越金 11,872,454

音楽科研究図書室だより

風 岡 陽 子 (27回)

時折、卒業生の方から楽譜や図書が借りられなくなつて不便ですといわれることがありますが、図書室は卒業生の方々にも門戸を開いております。皆様にご利用して頂けるよう、最近の図書室の動きを御報告致します。

今年3月に、2号館から音楽科の建物の5号館に10年振りに戻りました。広さは2号館のときに比べてあまり変わりませんが、移動書架をいれたこと、無駄なスペースが少ないこと、天井が高くなったことなどからでしょうか、明るく広くなったと好評を頂いております。扱っている資料は、和書4,700冊、洋書1,700冊、楽譜12,000冊、定期刊行物(雑誌類)106タイトル、レコード5,400枚、C.D.20枚を越えました。収集方針として、日頃の音楽の勉強に必要なものを揃えることはもちろんですが、小さくても専門性のある図書室にしたいと考え、キリスト教音楽、特に讃美歌については、かなり専門的な図書も受入れています。レコードに関しては、クラシック中心ですが、民族音楽関係やジャズのレコードもあります。オーディオ席が11席ありますので、図書室内で聴くことができますが、新著作権法改正により録音はできなくなりました。図書室外貸出は致しておりません。今後は視聴覚資料として、レコードの他、C.D.、カセット、ビデオソフト(現在、マタイ受難曲、トスカ、ドン・ジョバンニなど購入予定です。)を増やしていく予定です。

貸出冊数は、楽譜、図書、雑誌バックナンバー、各2冊で、貸出期間は1週間ですが予約者がいない限り延長ができます。期限は必ず、お守り下さい。なお閉館時間につきましては、現在、暫定的な閉館時間をとっておりますので、電話で御確認のうえ、御来室下さるようお願い致します。Tel. 661 - 0705

また、図書室が加盟しています音楽図書館協議会では、今年の11月より相互協力が稼動することになりました。相互協力は、共通閲覧証による相互利用、文献複写、相互貸借から成り立っていますが、詳細は相互協力ハンドブック(10月発行予定)を御覧頂きたいと思えます。どうぞお気軽に、図書室を御利用下さいませ。お待ちしております。

～ 支部だより ～

<中部支部> 会長 峯 沢 紉 子 (14回)

皆様お元気であらうでしょうか。昨年の秋の新人演奏会から御報告申し上げます。この演奏会、満席の盛況に終りましたこと、同窓生の協力のおかげと感謝しております。演奏の皆様は非常に力のある方ばかりでマスコミにもほめて頂き私も嬉しく思っています。特別演奏の大島君子先生のショパン、やはり又若い人と異なった音の豊にめらめらで端正な響き、音楽の深さなどで素晴らしい演奏を聴かせて頂きました。アンコールも掛かりました。先生のモーツァルト、シューベルトが聴きたいとの声もあります(先生又お願いします)今年には子供達の会より始まりましたが前半は完全に弾けない子供が多すぎ少々恥かしい会になり、会場も騒がしく反省しております。子供達の音楽会の目的を皆でもう一度再認識したいと思います。子供達への先生の迫込みを次回期待しております。

又5月22日に大島久子先生を再びお招きしまして公開講座をヤマハホールにて開きました。先生の充実したお話はいつも評判がよく、同窓生以外の皆様もフェリスはいつもよい催し物をすると言って下さいます。

フェリスはお嬢さんばかりで消極的で卒業すると皆駄目になると世間から云われていたましたが、漸く見直してくれる様です「フェリス、やるねー」と。同窓生の皆様頑張らましよう。

さて今年は滝川さち子さん(21回)がリサイタルを行います。

滝川さち子 ソプラノ
リサイタル
12月10日(火)
午後6時45分開演
中電ホール

Fグループ中部支部後援のこの会に皆様の応援をよろしくお願い申し上げます。

<西南支部> 田 村 淑 子 (8回)

以前には、親睦もかね毎年集まっておりましたが、多数の方々の御要望により、隔年に講演会を催すことになっています。

昨年6月に種田直之先生の講演会を、主催しましたので只今充電中です。

5月末の同窓会主催の三宅先生の記念会は盛会で楽しい一日でした。お世話係の方々の御苦勞に、感謝致します。久しぶりに、懐かしい方々にお会い出来ました。先生方にもお会い出来る楽しみに出席しましたのに、寺西、大町先生以外は何方にもお目にかかれず大変残念に思いました。2年くらい後には4年制になれるよう努力しているとの田中順先生からの御報告でしたが、今の私があるのは、フェリスで良き師に恵まれ、よき環境で音楽する楽しさ、努力をする貴さを教えて頂いたお陰と感謝しています。今の在校生も同じ気持ちで卒業していくのでしょうか。学校が大きくなるだけでなく、勉強する意欲をもち、何かを身につけて卒業していけるフェリスに、と望んでいます。

——本年度総会及び研修会の報告——

6月13日(木)、イギリス館にて本年度総会及び橋本英二先生をお迎えしての研修会が開かれました。橋本先生は現在、シンシナティー大学で教鞭をとっておられますが、同窓会でも度々講演をお願いしているなじみ深い先生で、チェンバロの演奏はもちろんのこと、バロックを中心に幅広い分野での御研究をなさっていらっしゃいます。今回はD・スカルラッチィーについて、その生涯、ソナタの構成、和声やリズム、テクニクなどの実際の演奏を交えての約2時間半余りの講演。生憎の雨模様でしたが、30名余りの同窓生を前に熱のこもったお話しは、ほんとうに貴重で得がたいものでした。まだ一度も研修会に参加されたことのない方、どうぞ一度お気軽に御出席下さい。必ずや新しい発見があると存じます。

Fグループ後援演奏会

- '84 12月20日 鈴木康子(30回)
フルートリサイタル 音楽の友ホール
 - '85 3月19日 小林美代子(11回)
メゾソプラノリサイタル こまばエミナース
 - '85 5月17日 石井美智子(6回) 三田陽子(6回)
ジョイントリサイタル 神奈川県民ホール
 - '85 6月16日 神戸倫樹美(20回)
現代ヴィオールコンサート展 音楽の友ホール
 - '85 11月30日 今藤当麻子・丸茂陽子(31回)
増井祐子(33回)
ジョイントコンサート 神奈川県民ホール
- 後援のお申し込みは3ヶ月前までに下記へお願い致します。

永川恵子

Fグループ主催演奏会

出演者募集のお知らせ

Fグループでは下記の要領で演奏会を予定致しております。出演を希望なさる方は、申し込み用紙をお送り致しますので御連絡下さいませ。

演奏会予定日 1986年5月～6月
会 場 神奈川県民小ホール予定
券 の 負 担 1人 100枚 程度 (1枚 1,500円)
人 数 2～3人
申し込み〆切 1985年9月末日
連絡先

永川恵子

尚、出演者はFグループ会員で先生の推薦のある方に限ります。また希望者多数の場合は書類選考とさせていただきますので御了承下さいませようお願い申し上げます。

役員 今期の当番幹事は小又好子・山本由紀子(12回) 田端裕子・丸茂陽子(31回)の4名です。尚、名簿の変更、お問い合せは当番幹事が受け付けております。 訃報 塩田美智子さん(3回) 平井道子さん(8回) 橋谷田幸子さん(28回)のお三人が御逝去なさいました。心から御冥福をお祈りいたします。